

大槌からの メッセージ

五月の連休に実施した大槌スタディツアーでは、地元の方々から、大変に感銘深いお話をいただきました。

その一部をご紹介します。

上野ヒデさん 大槌町婦人会会長



私は役場に勤めていた娘と退職していた夫と3人暮らしだったんですが、一瞬にして家も家族もなくなってしまいました。だから被災した町役場前に行くのが長い間つらかったの。1年半後の法要の時にね、人に手を引かれるようにして役場に行ったんだけど、あそこの建物を見上げたときに、ああ、やっぱりこれは残さなきゃという気持ちになりました。

というのは家族に言ってあったんですよ。

「地震の時とか万が一バラバラになったら、最後は城山に集合ね」って。にもかかわらず、うちの家族は逃げなかった。自然の威力を軽視した結果、犠牲者がいっぱい出たということで、役場（被災した遺構）を残さなきゃと思ったのはその時なんです。明治の津波でも昭和の津波でも、チリ津波も記念碑がありました。「地震がなくても津波と思え」と。それを町民が知らないの。言い伝えはいっこうに役に立ちません。ですから、



被災した大槌町役場。町長が変わり、震災遺構としての存続が危ぶまれている。

あの役場の無残な姿、自然の威力をね、防災教育の場に使ってほしい。残してくれ残してくれといっているんだけど、まあどうなるのかしらね。

地震が起こった時に、私はちょうど娘と同じ建物にいたんですよ。ただ、あの娘は役場職員だから業務があるだろうと思って、自分だけ逃げたんです。今こうして私がいろんなことをしているのは、あの娘が後押ししてくれてるんだと解釈しています。でも、こんなふうに家族のことを話せるようになったのは、ようやく今年になってからです。その前はね、言いたくなかった。よその方が「うちの旦那と、息子とケンカした」とかいうのを聞くと、「ああいいですね、ケンカする相手があって」と言ってしまう。そしたらシラケるわけよ。ああ失敗したなと思うんだよね。このごろようやく「うちの娘が、旦那が……」と言えるようになりました。

家族も家も全部なくなって、仮設住宅でボーッとしている時にね、「パレスチナ子どものキャンペーン」の若者が何度も訪ねてくるわけですよ。「女の人がんばらないと」って。なんで私みたいに一番大変なところに来たのかなと思って、最初は何もやる気がなかった。そのうちに、県の連合婦人会の会長、副会長も来るようになって、みんなに「応援するからがんばろう」とい



われて、じゃあということで会長になっちゃいました。最近では町役場の前にある慰霊の祭壇の管理や清掃と、全国から役場などに出向してくれている人たちへ感謝の意味を込めた炊き出しなんかをやっています。

だからみんなにも言うの。仮設だけにしないで、一歩踏み出せて。婦人会の方々は、もう元気がいいですよ、私みたいに。遺族もいるし、家のない人がほとんどだけ。だいいち仮設は4畳半ひと部屋、ウサギ小屋みたい。これから、もし何かあった時には、やっぱり最低6畳一間と4畳半くらいは一人だって必要ですよ。だんだん生活して、荷物ふえるでしょ、もうすこし考えてほしいなあって思います。

関 洋二さん

大槌町・安渡公民館長

被災当時の映像を見ていただくと子どもの声が聞こえます。中学生ですね。大人は声を出せない。大人はなにもできない。ただ見ていただけ。この津波を見た子どもたちはいま成人したばかりですが、その進路の多くが看護師、自衛隊や警察だそうです。目の当たりにこの津波を見た子どもたちの多くが「大槌のために」とか、「社会のために」と言って進路を決めたのです。

映像では防災放送、役所で流す「何メートルの津波が来ますよ。高台に逃げてください」という放送が聞こえません。大槌の場合、役場や消防署は津波で完全に破壊されて、聞こえるのは消防車のサイレンだけです。大槌の消防団第2分団が安渡地区なんです。ここに消防車が2台ありました。消防車は1台が流されて犠牲者がでています。うちの息子も消防団員で、たまたま家から出たのが遅く2台目の消防車に乗った。1

台目の消防車に乗っていたら、うちの息子もこの世の人ではない。私のところに消防車が流されたという情報が入って、その後に息子と会った時に、正直足が震えてきた。今でも覚えていますね。

このあと何年で完全に町が復興できるかはわかりません。30年たったら町が見られるかなという期待は持っていますけれども、ラグビーにしても、オリンピックにしても、日にちが迫っているものが優先されるとなれば、この北は北海道、南は千葉県の浦安まで広がる被災地は後回しにされるのかもしれない。どこを一番にして、どこを二番にするなんてことはないのです。どこも一番なんです。大槌町には48の仮設団地があって、安渡の住民も全部の仮設に散らばっている。将来安渡に戻りたいと考える人はおそらく100%とは思うのですけれども、ただ実際的に家を構えられるのは何人いるのかな？と疑問に思います。

皆さんの地域でもそれぞれ危険箇所、津波、山津波、川の決壊などについて、話されていると思います。私も全国で講演させていただいていますが、それぞれの地域に見合った防災活動が必要かと思います。3・11の午後、雪が降ってきた時撮った写真を見ると、皆が下を向いているんです。こういう状態にならないような活動をして頂きたいというのが私の願いです。それでも、安渡で自慢できる事は自殺者がゼロということです。避難所での朝礼の時には「津波で助かった命だから、自分で命をつめるな」と喋っていたんです。そのためか未だに安渡の地域から自分の命をつめた人はいません。ただ、この仮設からいつ出られるのか、いつ衣食住の住の部分のはっきりするのか、みな不安に思っています。

東南海地震、今朝も伊豆で地震があり、このところ頻発しています。火山も噴火しています。いろいろな自然災害には太刀打ちはできませんが、知恵を絞って犠牲者を少なくする取り組みをして頂きたいなと願っております。



「大槌町子どもセンター」の子どもたち

同センターは当会が建設して大槌町に寄贈し、小学生の放課後の居場所として使用されています。今年も毎日たくさん子どもたちが来館して元気に過ごしました。なお子どもたちの写真は、本文とは直接関係していません。